

みかん雑話

—その伝来の歴史をたどる—

蒲江浦 静 磯 漁 史

(会員 小 野 武 夫)

◎ 慶みかんつたわる

みかんの原産地は、中国だといわれている。それが日本列島に伝わってきたのは、六〇〇年ぐらい前ではないかとみられている。

古い伝説では、垂仁天皇のとき、田道間守が南の方へトキジフノカグノコノミとトリにいったという話があり、肥後国には、神功皇后が三韓征伐のとき、夕子バナを持ち帰って、肥後八代に植えたとあるが、いま全国につくられているみかんの祖先は、熊本県八代から鹿児島県長島にかけてつくられていたものといわれている。高田には樹令六百年ほどのみかんの木があったが、大正十一年(一九二二)洪水のために流れたり、枯死したりして、現存するものは一本だけ。これについて古い本は、大分県津久見市青江の樹令四百年のもので、これは八代から移植したものとされている。

また唐みかんは、別名を大仲島、または仲島といっているものは、このみかんが大仲島(鹿児島県長島)へ伝えられたためにこの名があるかである。そしてたぶんここを中心として、まず九州全島にひろがっていった。

かのようで、鹿児島県大根占、福岡県浮羽郡・長崎県西彼杵郡・熊本県天草など、いずれも江戸時代の初めごろまでは、対岸の水俣などに長島の人々が、粒が小さく種子の多いみかんを売り歩いた。ところが、中国から渡ってきたみかんは、日本で栽培されている間に、つぎつぎに枝がわがでて、その枝がわがわがしたものを接木して育てると実が大きくなり、ついに今日のようになり、みかんになつてくるのであるが、その長い苦心の歴史のなかには、九州でつづられたのである。

ところがこのみかんが永享年間(一四二九—一四四一)紀伊(和歌山県)の糸後にもたらされる。一説には天正年間におなじ県の高野山の僧たちが、しきりに進物にわかつているから、天正より古くからあったことが推定される。そしてここに紀州みかんのすばらしい發達がみられる。みかんは、日本人の好みに適した果物であったから、各地へぐんぐんひろがっていき、民間でも多く用いたが大名たちがしきりに贈り物にわかつた。そのため早くから貨幣価値を生じ、開防などでは、温州ではないが、慶長年間(一五九六—一六〇四)すでにみかんの木は後がわかつている記録がある。(以上平見社「風土記日本」巻五による)

◎ 大分県のみかん史

豊後国におけるみかんといえば、昔から津久見が有名であったが、いまは国東方面が新興産地として、大きくクローズアップしている。しかし沿革ということになると、やはり津久見である。

津久見については、昭和十八年三月、別府市の図書館選奨会主幹木村好兵衛編さん、津久見の二村萬也岡本慶夫・宮本佐四郎らが現地の資料を提供した『津久見柑橘史』が刊行されている。この書物には『古事記』(七二二)

に出でくる橘(高江野ではアベミカンと呼んでいるもの)の起原から津久見にみかんが導入された過程、伝説、または技術的な肥培管理法、販売、検査、そして豊富な統計資料など、学術的・科学的に詳述された貴重な文献であり、数前の部については本書を引用するところが多い。

〔樹令八百年の元祖木〕

前に四百年と書いたが、さう早く二村薫の序文「発刊に際して」から、現代文をおいて引用させてもらう。

(前畧) 口碑によれば神武天皇が東征の節、船を徳戸島(保戸島)に寄せられ、登られた山を「皇登山」水晶山と称した。そのときに住民がみかんと献上したと伝えられるから、古代すでに当地方にみかんがあったことがうかがわれる。

とすると、前述の田道副守が往ったという常世の國は、わが豊の國らしく思われる。

のち天平十二年(七四〇)伊藤仁左衛門が青江の松川に居住、みかんの栽培を研究したという。

また保元二年(一一八七)には、又四郎が、青江の蔵富に住んで、松川からみかんの木を移植して、その繁殖を図った。それがすなわち尾崎の先祖木(元祖木)で樹令八百年、一本よく四畝十五歩の面積に伸び、最も古くから、しかも最も大きい日本一のみかんである。

この樹は、慶長七年(一六〇二)川野清左衛門の所有となり、子孫継統して昭和十二年(一九三七)六月、文部大臣から天然記念物に指定され、現在川野寛氏(一九六七年現在)息子の昭義氏が管理している。

その他、津久見岩屋の片代に、樹令六百年のみかんの木がある。

「臼井史談」によれば、慶長十五年(一六〇〇)臼井藩主稻葉侯が、みかん二〇〇個を朝廷に献上して、女房奉

書を下賜されたとある。昔は、当所(津久見)では、温州のことき単に「小みかん」と称していたというから、献上したみかんは温州である。してみれば、古くから栽培されていたと思われる。前記の青江蔵富の小野豊氏所有の温州みかんの樹は、これまた日本一の大木とされているが、この畑は稻葉侯のみかん畑であったという。

② 新しい津久見のみかん

八代みかんは、肥後細川侯が参勤交代に際し、船子の暮集を、大庄屋岩崎太左衛門に依頼、その返礼として贈った品物の中にみかんの木があった、これを全所に広めたと伝えられる。

また有名な早生温州は、青江蔵富が原産で、日本内地はもちろんだ。世界の早生温州であるが、これは嘉永三年(一八五〇)四月に、藝師寺米治栽培のもので、その後明治六年に移植して発生した。これは川野仲次氏の早生温州とともに、現在盛んに栽培されている早生温州の源をなしている。

なお最近としては、昭和六年蔵富の村上進氏所有のみかん園に、夏橙が甘味強きものを生じ、村上橙と名付けて、夏柑の新品種として将来を期待されている。

以上を総合すると津久見みかんは、長い年月の間、当地方の栽培者によつて、

橘——小みかん——温州——早生温州——

と改良されたものと考えられる。

こう見てくると、わが日本列島の優良品種は、津久見に源を察して、全国に広まったといつても決して過言ではないと考える。

佐伯藩とみかん

鶴藩略史によれば、佐伯藩六代高慶公の特、享保十四年(一七三三)十月、津久見村初めて蜜柑を献ず。公これを高祖養賢公の廟に薦む。初め養賢公佐伯に就封、各其地理に因つて樹芸を勧む。特に津久見の地は柑橘に適するをもつて、村民をして之を栽培せしむ。其業漸く盛んとなり、公に至り益々之を奨励し、四山果樹ならざるの地なし。産額頗る進み、遍く四方に販し、歲收巨利也。これにより年々この献あり。——とある。

旧藩時代、津久見・四浦・保戸島(今の津久見市の大部)は、佐伯藩領たりしも、明治十一年海軍艦が南・北に分轄され左際北海部に編入された。津久見みかんの名声は高かへたが、この文献によると、津久見みかんというより、むしろ佐伯みかんと言つたら、さぞ津久見の人が怒るであらうが、……。

慶長十一年正月、藩主高政公曰

一百箇の屋敷まわり、所在所まわりにて、山桃の木・柿・梅の木・梨の木など、材木にも薪にも一切きり申しまじく事

とおふれを出している。

しかし、寛保二年(一七四二)十一月、藩主毛利高岳が領内全般に頒布した「五人組帖」の中には除かれているようだ。同おふれは全文四十六条あって、かなり詳細にあつているが、この禁伐のことは除かれている、その理由はわからない。

高政公自家のまわりになり木(果樹)を植えさせ、またこれを伐らせぬように命じたのである。

私たちが町や村にある橙や、みかん・びわ・夏みかん・九年母・金柑・梅・梨・柿等も、その保護をうけたので

ある。屋敷まわりのみでなく、農民所有の畑のかくらの中にも、大ていの農家はみかん・梨の類も所有して、正月のおかざりや、いわしの酢のものの調理用や、農繁期に畑の隅にそそり立つこぼらの果物の恩恵をうけ大人は湯いたのどをうるおし、子供たちはこれを唯一のたのしみとして耕地に足を向けたものである。

前記の果樹のほかに、山桃などがあつて、特に蒲江町の田下入津地、高山海岸の県道付近に山桃が多く、梅西前後のさつまいも植竹けごろ、採取して売りに来るのを、争つて買つていたことを記憶する。特に密柑の類は、橘・枳・九年母・小みかんといつて、薬師知永正月八日の縁日に、餅ではかり売りして、かきいみかんは珍重せられた。だいたいなど、日常生活に欠かせないものであつた。

(おこしわり) 小野氏の「みかん栽培」は、なお延々とつづく。大敵の涉梨栽培、比較照会も行き届き原稿欲ハ。故に及ぶべし。大まで、限られた版面にはその半分も載せることは出来ない。そこで以上、郷土に直接つながりある部分だけを掲げ、大部の方は割愛した。諒とされたい。(編集者)

紹介

黒澤 東光庵

青山黒沢会員 山崎 作 一

東光庵は堅田川の上流、黒沢の中程の山腹にあつて、二十数段の石段を上る小高い所、前には清い小川が流れ境内には有名な桜があり、もろもろの古塔が立ち並んでいて、春夏秋冬色とりどりの花が咲きつづけている。こ